

## 福岡県共通感染症発生状況等調査の結果について

福岡県では、県内における人獣共通感染症の発生状況を把握し、人に感染した場合の迅速な診断につなげることや、まん延防止に寄与することを目的として、平成26年度から、県内動物病院の協力の下、最も身近な愛玩動物である犬や猫を対象に、人獣共通感染症の病原体の保有状況調査を実施している。

令和3年度から令和4年度は、コリネバクテリウム・ウルセランス感染症及び重症熱性血小板減少症候群（SFTS）を対象感染症とした調査を実施したので報告する。

### 1 はじめに

コリネバクテリウム・ウルセランス感染症は、ジフテリア毒素産生能を有するグラム陽性短桿菌のコリネバクテリウム・ウルセランスが引き起こす、ジフテリア様の症状を示す感染症である。人、犬、猫、牛のほか、様々な動物において感染事例が確認されており、咽喉頭、肺、皮膚、乳腺などに、様々な症状を呈する人獣共通感染症である。海外においては乳房炎や関節炎に罹患した牛の生乳からの感染が確認されているほか、最近では、感染した犬や猫との接触や飛沫による感染が国内外で広く確認されるようになっている。人における確かな潜伏期間は不明であるが、呼吸器感染の場合には、初期に風邪に似た症状を示し、その後、咽頭痛、咳などとともに、扁桃や咽頭などに偽膜形成や白苔を認めることがある。重症な症状の場合には呼吸困難等を示し、死に至ることもある。当該感染症については、令和元年度から令和2年度に、猫の咽頭ぬぐい液を検体とし、164検体について調査した。その結果、1検体からコリネバクテリウム・ウルセランスが分離・同定され、この分離株に対し毒素原性試験を実施した結果、ジフテリア毒素が確認された。また、他自治体の調査では、犬の咽頭ぬぐい液から分離・同定されたことが報告されている。このため、令和3年度から令和4年度は、対象を犬に変更して調査を行った。

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）は、フェニエウイルス科バンヤンウイルス属のフアイヤンシャン・バンヤンウイルス（通称SFTSウイルス、以下「SFTSウイルス」という。）によるダニ媒介感染症である。ウイルスを保有しているマダニに直接噛まれることのほか、マダニに噛まれて感染した動物の体液や、感染患者の血液、体液との接触感染も報告されている。感染すると6日～2週間の潜伏期を経て、発熱、消化器症状（食欲低下、嘔気、嘔吐、下痢、腹痛）が多くの症例で認められ、その他頭痛、筋肉痛、意識障害や失

語などの神経症状、リンパ節腫脹、皮下出血や下血などの出血症状などを起こす。重症化し、死亡することもある。当該感染症については、犬及び猫の血清を検体とし、平成29年度から平成30年度に147検体（犬73検体、猫74検体）、令和元年度から令和2年度に109検体（犬55検体、猫54検体）について調査した。その結果、平成29年度から平成30年度の調査では犬2検体、猫1検体から、令和元年度から令和2年度の調査では犬3検体、猫1検体がIgG抗体陽性となった。過去2度の調査でいずれもIgG抗体陽性の愛玩動物が複数体検出されており、引き続き感染動向の監視が必要と考えられることから、令和3年度から令和4年度は、調査を継続した。

## 2 調査方法

### (1) コリネバクテリウム・ウルセランス感染症

- ① 対象動物：愛玩動物として飼育された犬
- ② 検体：咽頭ぬぐい液 157 検体
- ③ 調査内容：コリネバクテリウム・ウルセランスの分離・同定  
(分離された場合は、毒素原性試験を併せて実施)

### (2) 重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)

- ① 対象動物：愛玩動物として飼育された犬及び猫
- ② 検体：血清 101 検体 (犬 50 検体、猫 51 検体)
- ③ 調査内容：PCR 法による病原体遺伝子検査  
ELISA 法による IgM 抗体検査  
ELISA 法による IgG 抗体検査

## 3 結果

### (1) コリネバクテリウム・ウルセランス感染症

- ・ 分離同定検査による検出数  
犬 0 検体/157 検体 (検出率 0%)

### (2) 重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)

- ・ 病原体遺伝子検査による陽性数  
犬 0 検体/50 検体 (陽性率 0%)、猫 0 検体/51 検体 (陽性率 0%)
- ・ IgM 抗体検査による陽性数  
犬 0 検体/50 検体 (陽性率 0%)、猫 0 検体/51 検体 (陽性率 0%)
- ・ IgG 抗体検査による陽性数  
犬 0 検体/50 検体 (陽性率 0%)、猫 0 検体/51 検体 (陽性率 0%)

## 4 まとめ

### (1) コリネバクテリウム・ウルセランス感染症

令和3年度から令和4年度にかけて、犬157頭から咽頭ぬぐい液を採取し、コリネバクテリウム・ウルセランスの分離同定検査を実施した結果、検出率は0%であった。

また、令和元年度から令和2年度にかけて、猫164頭を対象に同検査を実施した結果、検出率は0.6%であった。

さらに、県内における人の感染は、平成28年の1件を最後に確認されておらず、現段階では、愛玩動物として飼育される犬及び猫から人がコリネバクテリウム・ウルセランスに感染する可能性は低いものと推察される。

しかし、令和元年度から令和2年度の調査で保菌している愛玩動物が確認されたことや、過去に県内において動物から人への感染例が報告されていることから、動物と触れ合った際の手洗いを励行すること等の一般的な感染予防対策が必要であり、このことについて広く県民へ周知することが重要と考えられる。

### (2) 重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)

令和3年度から令和4年度にかけて、犬50頭、猫51頭から血清を採取し、病原体遺伝子検査、IgM抗体検査、IgG抗体検査を実施した結果、陽性率はいずれも0%であった。

また、平成29年度から平成30年度にかけて、犬73頭、猫74頭を対象に病原体遺伝子検査及びIgG抗体検査を、令和元年度から令和2年度にかけて、犬55頭、猫54頭を対象に病原体遺伝子検査、IgM抗体検査、IgG抗体検査を実施した(表1)。その結果、犬5頭、猫2頭においてIgG抗体検査が陽性であり、平成29年度から令和4年度までの6年間の調査では、IgG抗体検査の陽性率は犬2.8%、猫1.1%であった。

さらに、県内における人の感染は、令和元年に6件、令和2年に2件、令和3年に1件と継続して発生しており、愛玩動物として飼育されている犬や猫から直接、あるいは愛玩動物からマダニを媒介してSFTSウイルスに感染するリスクは低いとは言えないと考えられる。

飼育者は、マダニ駆除剤の使用により愛玩動物へのマダニの付着を防ぐことや、愛玩動物の健康状態に注意し過剰な触れ合いは控えること、触れ合った後の手洗いを励行すること等の感染予防が重要と考えられる。

表 1 平成 29-令和 2 年度の重症熱性血小板減少症候群（SFTS）の調査結果

		陽性数		
		病原体遺伝子検査	IgM 抗体検査	IgG 抗体検査
H29-30	犬	0 検体/73 検体	-	2 検体/73 検体
	猫	0 検体/74 検体	-	1 検体/74 検体
R1-2	犬	0 検体/55 検体	0 検体/55 検体	3 検体/55 検体
	猫	0 検体/54 検体	0 検体/54 検体	1 検体/54 検体

## 5 今後の予定

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）については、県内における人の感染が継続して発生していることや、IgG 抗体検査の陽性率が犬 2.8%、猫 1.1%と決して低くないことから、調査を継続する必要があると考えられる。

また、令和 4 年度には、県内で、川遊びの後にレプトスピラが感染したと疑われる事例が発生している。レプトスピラに感染すると、3 日～2 週間程度の潜伏期を経て、発熱、悪寒、頭痛、筋肉痛、腹痛などの症状が現れる。風邪のような症状のみが現れる軽症型から、黄疸、出血、腎不全などの症状が現れる重症型まで症状は様々である。レプトスピラ症は、病原性レプトスピラを保有している動物の尿で汚染された下水や河川、泥などにより経皮的に、時には汚染された飲食物の摂取により経口的に感染する人獣共通感染症である。愛玩動物における発生状況を把握することは、人に感染した場合の迅速な診断や、まん延防止に寄与すると考えられる。

以上のことから、令和 5 年度から令和 6 年度は、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）及びレプトスピラ症を対象とした調査を実施することとする。